２.園部城跡第８次発掘調査報告

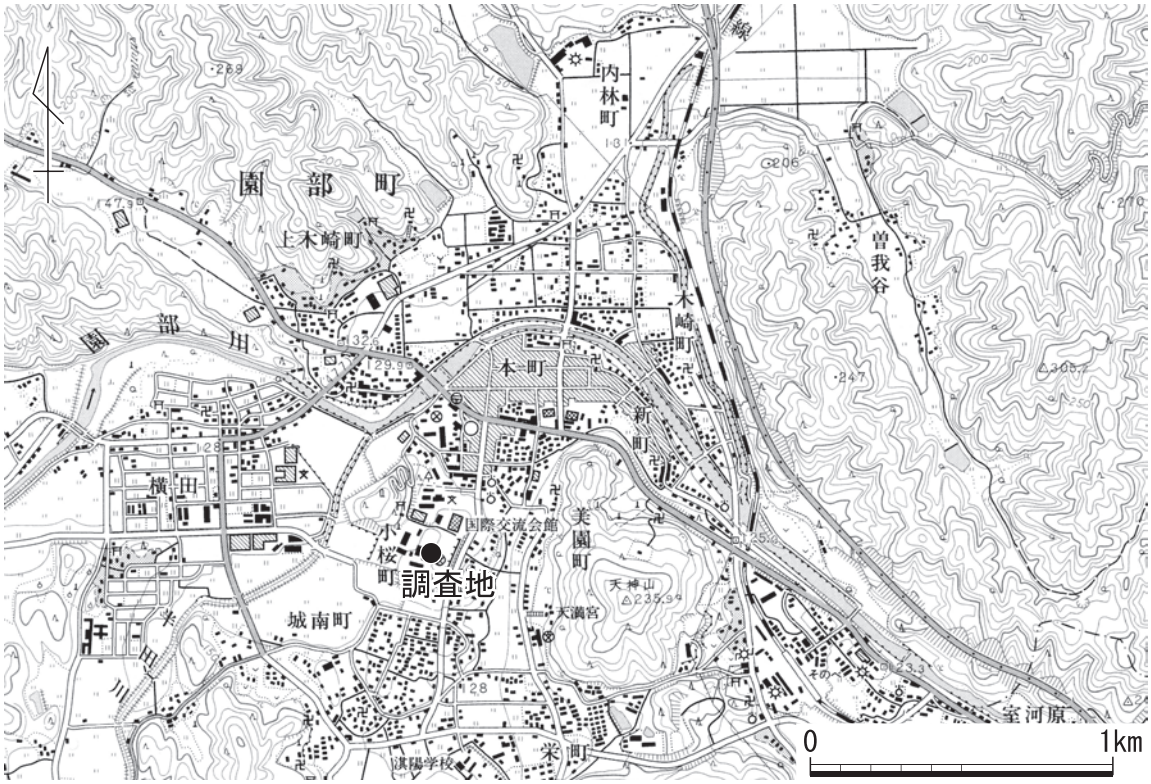
１.はじめに

今回の発掘調査は、京都府立園部高等学校校舎新築工事に先立ち、京都府教育庁管理部の依頼を受けて実施した。

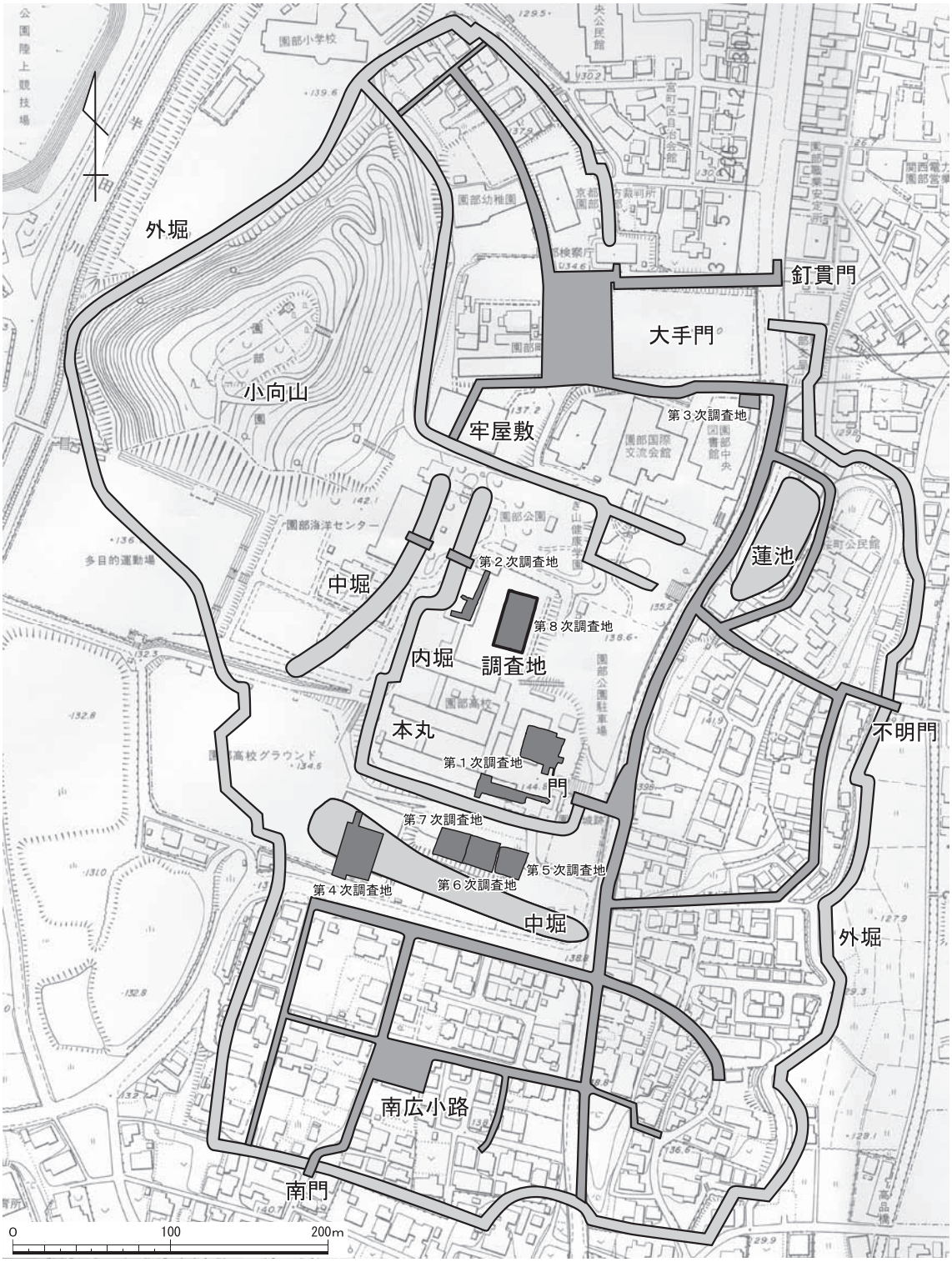
現在の園部高校一帯は、園部城跡として知られている。園部城は、小出吉親によって元和５～７(1619～1621)年に陣屋として築造され、幕末維新期には京都を守る目的で、慶応４(1868)年から明治２(1869)年に大規模な改築が行われ、園部城として整備された。現存する櫓門や巽櫓などはこの時に造られたと言われている。なお、明治４(1871)年には廃藩置県により城としての役割を終えた。園部城跡では過去７回の発掘調査が行われ、石組の溝、塀、井戸、空堀跡などが確認されている。また、埴輪をもつ方墳２基(小桜古墳群)も確認されている。

今回の調査地は、園部城本丸の北半部に相当する。

本報告は、当調査研究センター主任調査員戸原和人と同引原茂治が執筆した。文責については文末に記した。調査にあたっては、南丹市教育委員会、南丹市文化博物館、京都府立丹後郷土資料館、京都府立園部高等学校等関係機関の協力を得、また、地元の方々には作業員、調査補助員としてご協力を得た。記して感謝します。



第１図　調査地位置図(国土地理院　1/25,000　園部)



第２図　園部陣屋と発掘調査地
〔園部町全図（２）南丹市立文化博物館復原図より〕

なお、調査に係る経費については、京都府教育委員会が全額負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　調査第２課課長補佐兼調査第１係長　小池　寛

同　主任調査員　戸原和人

調　査　場　所　南丹市園部町小桜町 97

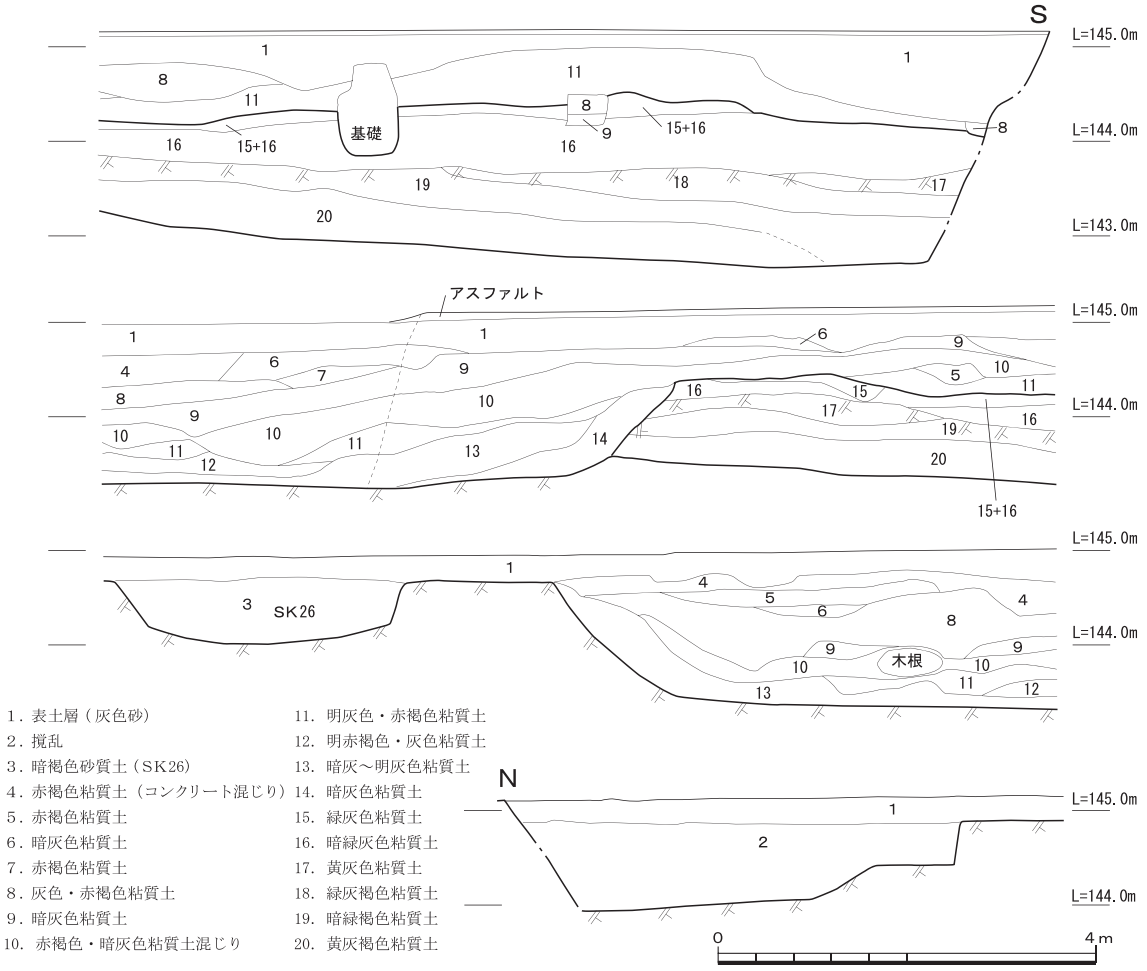
現地調査期間　平成 22 年 12 月 20 日～平成 23 年３月３日

調　査　面　積　600㎡

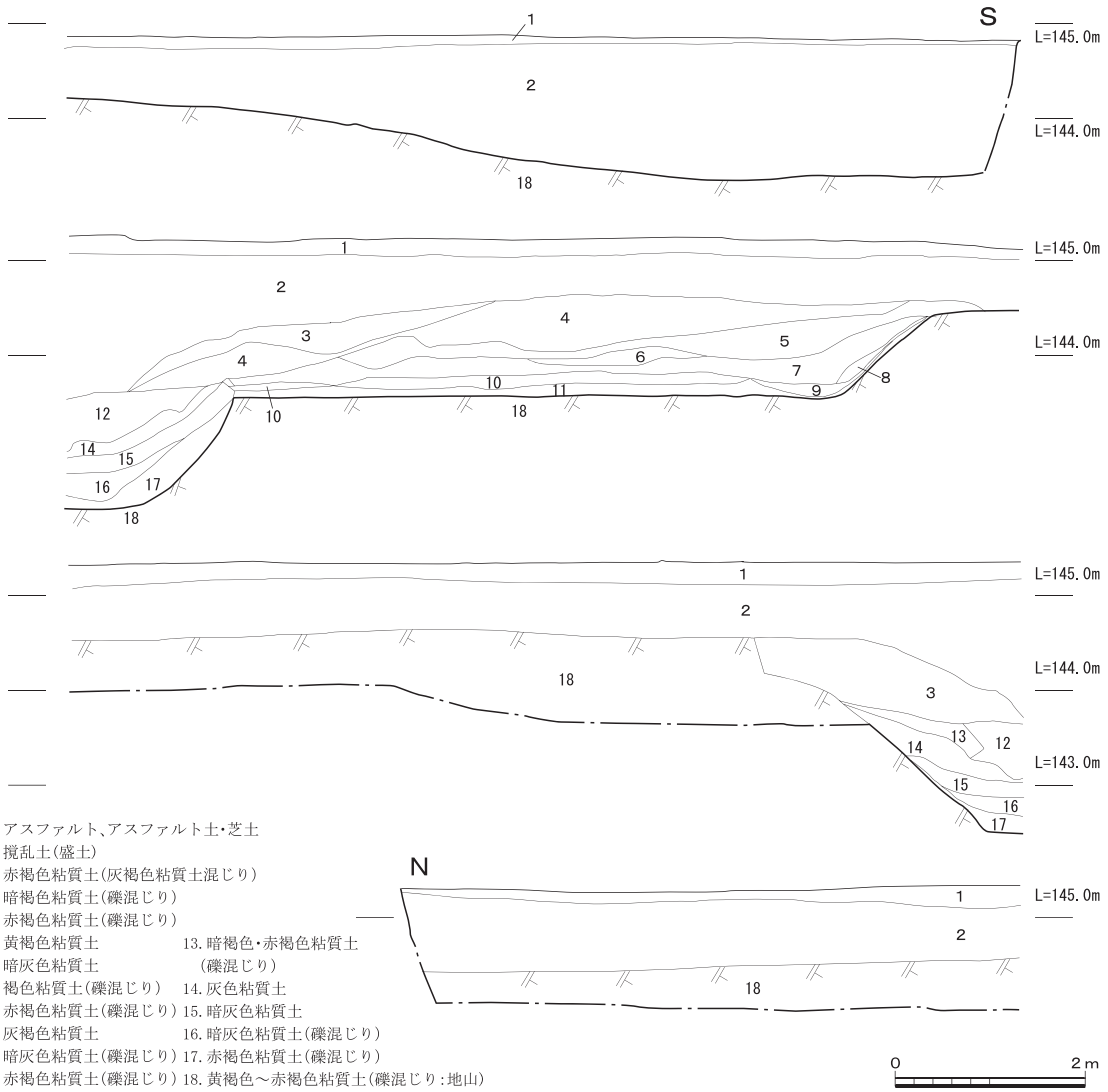
２.層序（第３・４図）

調査地の標高は概ね145mを測る。今回の調査地は旧体育館の跡地で、解体後はアスファルトと芝生に覆われていた。調査地の北辺部は、解体時の基礎除去作業によって大きく削平を受けていた。トレンチ西壁断面(第４図)でみると、重機により第２層までの盛り土層を取り除き、順次手掘りに切り替えて調査を実施した。北半部では地山上面で柱穴や土坑を検出した。中央部分では、第３層から第11層までの土によって埋め戻された空堀ＳＤ05を検出し、さらに空堀の底面で第12層から第17層の土によって埋められた溝ＳＤ100を検出した。

トレンチ東側断ち割り土層断面(第３図)でみると、空堀(第８～14層)以南では、遺構を検出したのは第15・16層上面で、地山(第17層以下)直上の第15・16層は園部城造営時の人工的な整地土と考える。地山直上では遺構を検出できなかった。空堀ＳＤ05は、西側においては北側から埋



第３図　トレンチ東側断ち割り土層図



第４図　トレンチ西側断ち割り土層図

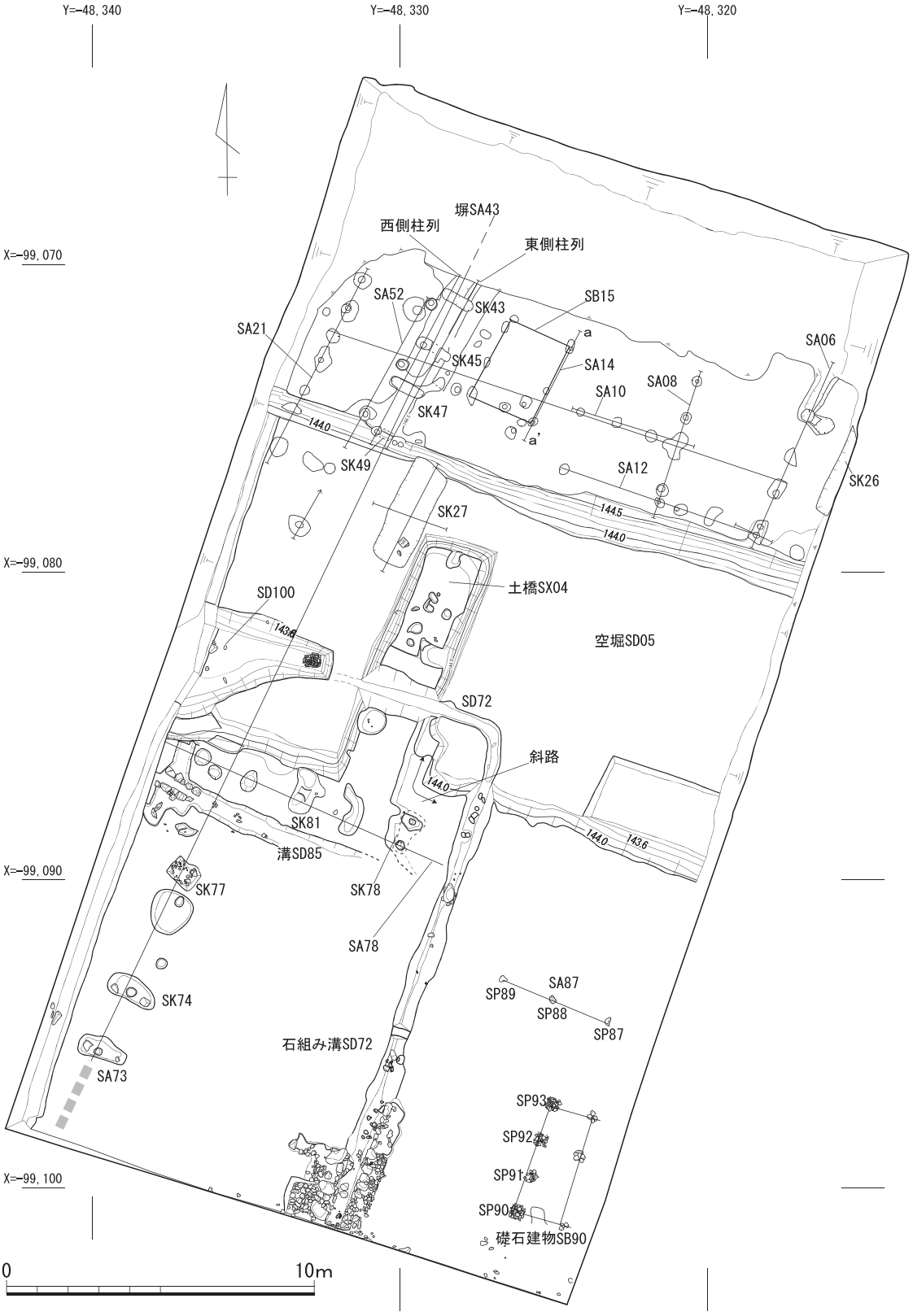
められており、東側では南と北の両方から埋められている。

３．検出遺構(第５図)

調査は、校舎新築予定地内で土置き場を確保しながら実施したため、北半部と南半部の２回に分けて調査を行った。

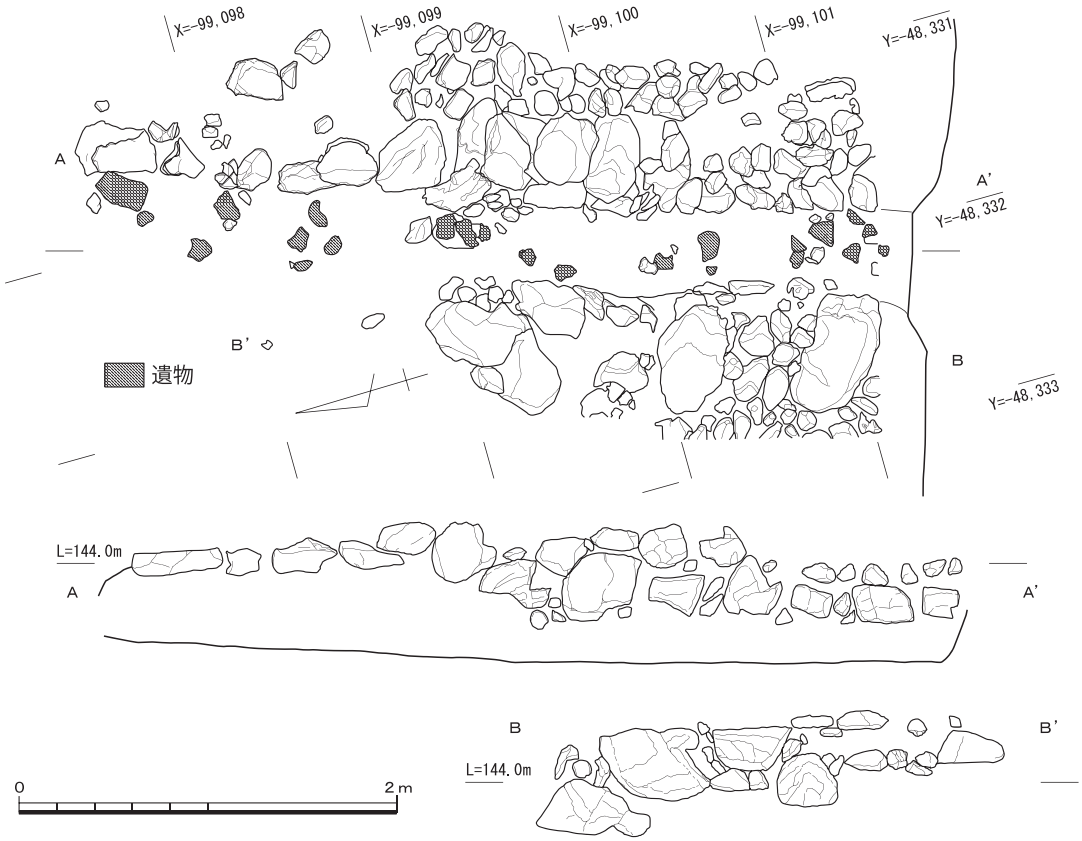
調査の結果、調査地の中央部で東西方向の空堀ＳＤ05と土橋ＳＸ04を検出した。空堀の北側では土坑、柵、塀、掘立柱建物跡、溝を確認し、空堀の南側では、石組溝ＳＤ72・85、柵、塀、根石をもつ建物跡ＳＢ90や土坑などを確認した。

空堀ＳＤ05　調査地の中央部で東西方向の堀を検出した。幅12ｍ、深さ1.3～1.8ｍを測る。断面は逆台形で、総延長18ｍ分を検出した。堀底は平坦に仕上げられているが、調査地内の南東隅は南北1.9～2.3×東西4.1ｍ以上にわたって約0.3ｍの深さで二段に掘削されていた。堀の内部には溜水を示す土壌堆積は認められないことから、空堀であったと考えられる。この空堀によって、本丸は南北２つの曲輪に分けられていたと考えられる。埋め土の底面近くから幕末維新期頃の陶器などが出土したことより、この頃にこの空堀ＳＤ05は埋められたと考えられる。



第５図　遺構配置図

土橋ＳＸ04　空堀の南辺から北辺に向けて地山を削り残して造られた幅 2.8 m、高さ 0.95 ～ 1.2 m、長さ 7.8 mの土橋である。土橋の南東側には、幅 70cm の「L」字状の斜路が設けられており、堀底に降りる構造となっている。北側３mは切断されており、木橋が架けられていたと考えられ



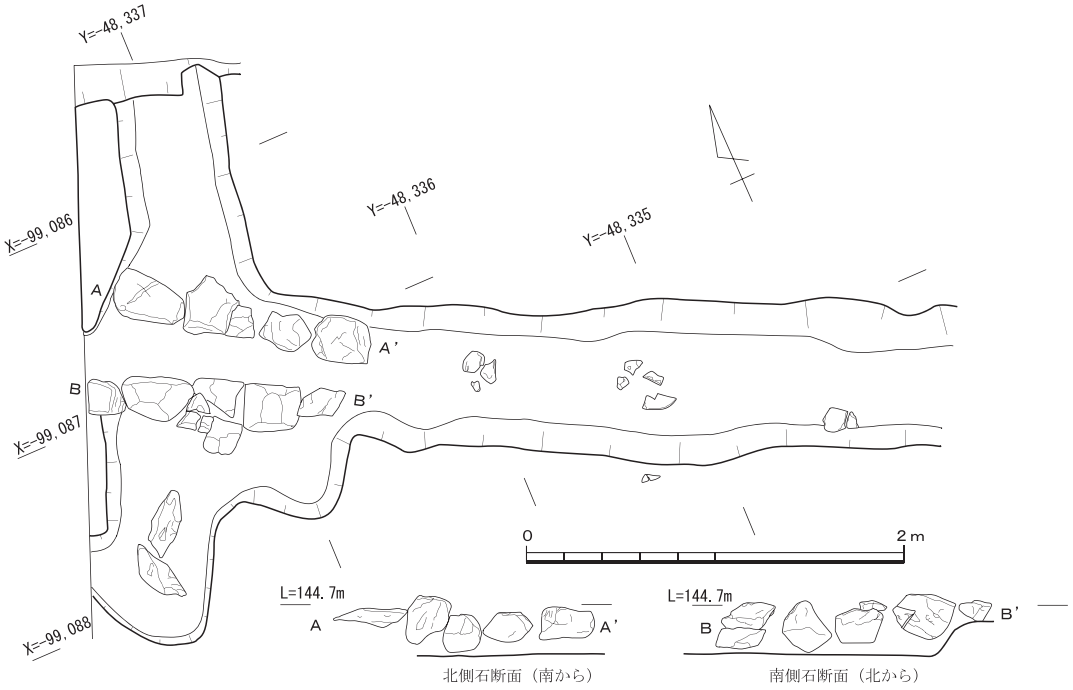
第６図　石組み溝ＳＤ72実測図

る。土橋の主軸は座標北に対してＮ７°Ｅを測り、空堀とほぼ同じ傾きを有している。

石組溝ＳＤ72（第６図）　調査地の中央南半部で検出した南北方向の溝で、幅0.6m、検出面からの深さ0.45mを測り、掘形の断面は北半部で「U」字形、南半部の西側断面が「片薬研堀」の形を呈する。総延長15.4m分を確認した。調査地の南端部では、長さ5.6mにわたって２段分の石組みが残っていたが、この北側では石組みは認められなかった。石組みの遺存状況から、おそらく、素掘りの溝であったと考える。この溝は、空堀の手前3.5mの地点で60×35cmの石が溝中にあり、この地点で掘形が片薬研堀から「U」字形へと変わっており、しかも溝底は北側で約20cm上がっている。溝の北側は空堀の中に延びており、堀の底で溝底を確認した。北側では西に折れ、土橋を切断して下層溝ＳＤ100まで溝底が達している。空堀埋土内では、上部の掘形は確認できなかった。南北溝の主軸は座標北に対してN19.5°Eを測る。

溝ＳＤ85（第７図）　調査地の中央部西側に位置し、空堀の南側で検出した。溝は空堀と方向をやや異にし、西側で緩やかに溝に近づいていく。幅0.6m、深さ0.3mを測り、総延長5.5m分を確認した。東端は攪乱のため検出できなかったが、東の延長部は、石組み溝ＳＤ72が掘形を変える位置にあたる。西端には石組みが５石分残っており、この部分の掘形は北と南に溝状に掘削されていた。

土坑ＳＫ77（第８図）　調査地の中央部西端で検出した。平面は長方形の土坑で長辺1.0m、短辺0.7mを測り、深さ0.1mを測る。土坑内からは瓦、土師器皿、陶磁器などが出土した。



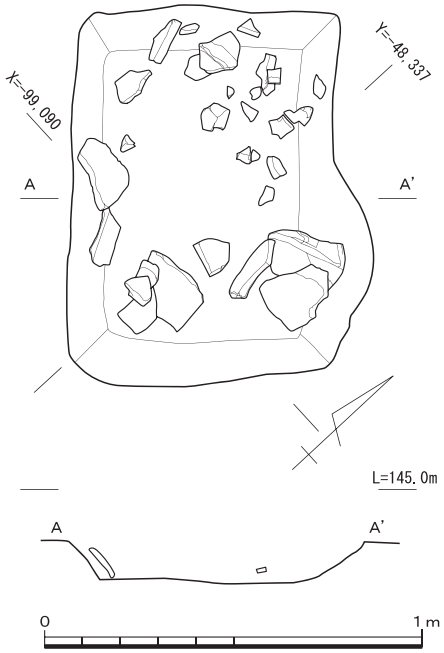
第７図　溝ＳＤ85実測図

溝ＳＤ100（第９図）　ＳＤ05底面の西南側で検出した。この溝は調査地外に延びており、東端の幅1.1m、西は調査トレンチの西壁で幅3.7m、深さは東端で約１mを測り、西に向けて徐々に深くなり、空堀の底面から最大で深さ1.2mを測る。北辺は直線的であるが、南辺は湾曲しつつ広がっている。溝の東端では、東西55cm、南北45cmの範囲に川原石が敷かれ、その南・北と東の３辺に平瓦を立て並べた敷石状の遺構を検出した。三面の瓦の上には厚さ３cm程の有機質が高さ約１mにわたって認められたことから、何らかの施設がこの上に付属していたものと考えられる。瓦が立てられていた状況から、板箱状のものが瓦の真上に縦方向に立てられていたものと考えられる。溝の底から16世紀末～17世紀初頭の土師器皿などが出土している。

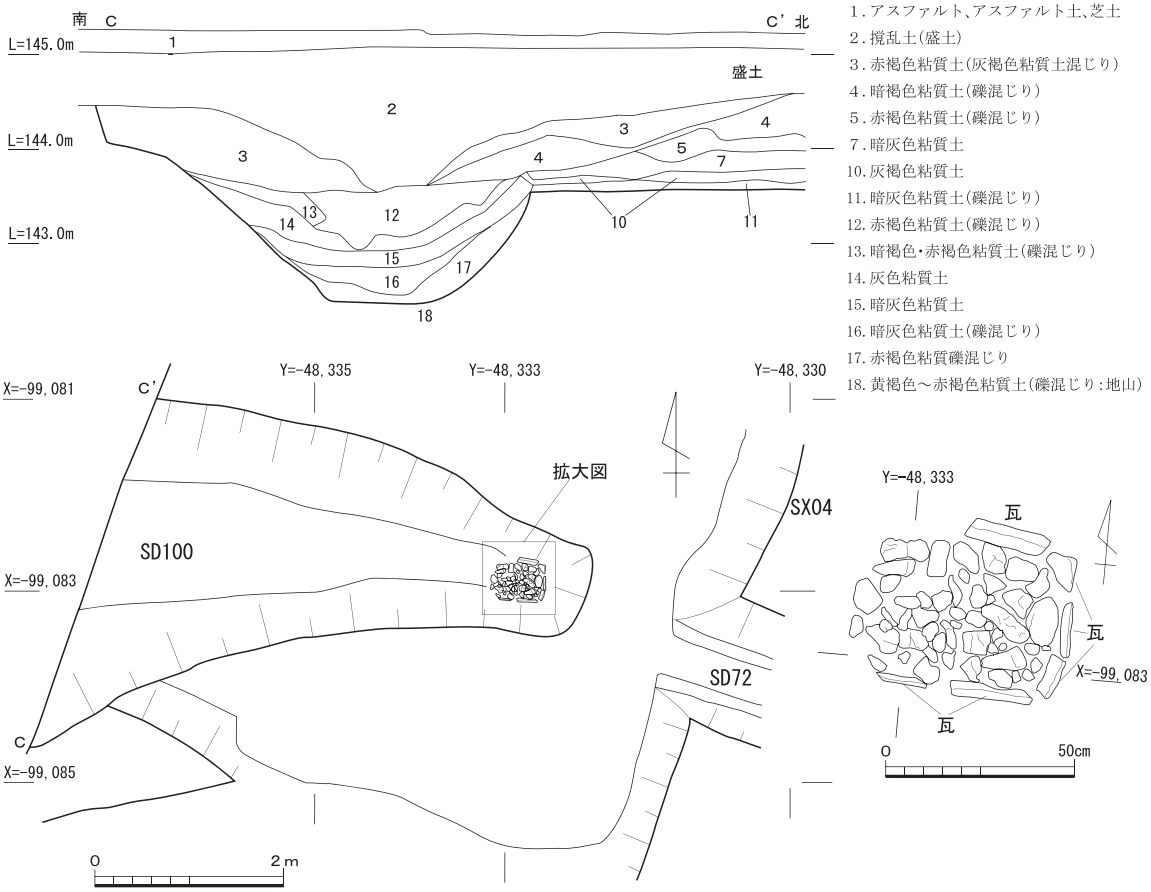
土坑ＳＫ26　調査地の北側東端部で検出した南北3.0m以上、東西0.4m以上、深さ0.4mを測る土坑である。調査地の東に広がるため土坑全体の規模は不明である。土坑の西辺はＳＡ06に並行する。

土坑ＳＫ27（第11図）　ＳＤ05の底面で検出した。土橋ＳＸ04の西辺に接するように掘られた平面長方形の土坑である。南北3.4m、東西1.2m、深さ0.28mを測る。土坑内からは「そのべ」と刻印された平瓦が出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ15（第10図）　調査地の北半部、土橋の北側で検出した東西１間、南北２間の建物跡である。



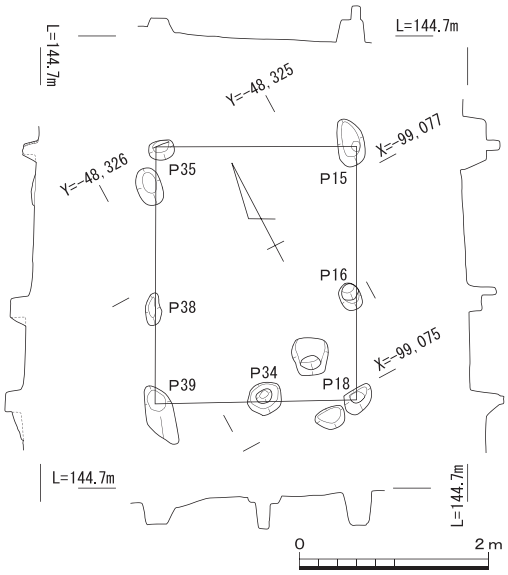
第８図　土坑ＳＫ77実測図



第９図　溝ＳＤ100実測図

柱掘形は直径0.2 ～ 0.3mの不定形で、深さは0.2 ～ 0.4mを測る。東西の柱間は2.1m、南北は北で1.5 ～ 1.7m、南で1.1 ～ 1.2mを測る。建物跡の主軸は座標北に対してN28° Eを測る小規模な建物跡である。

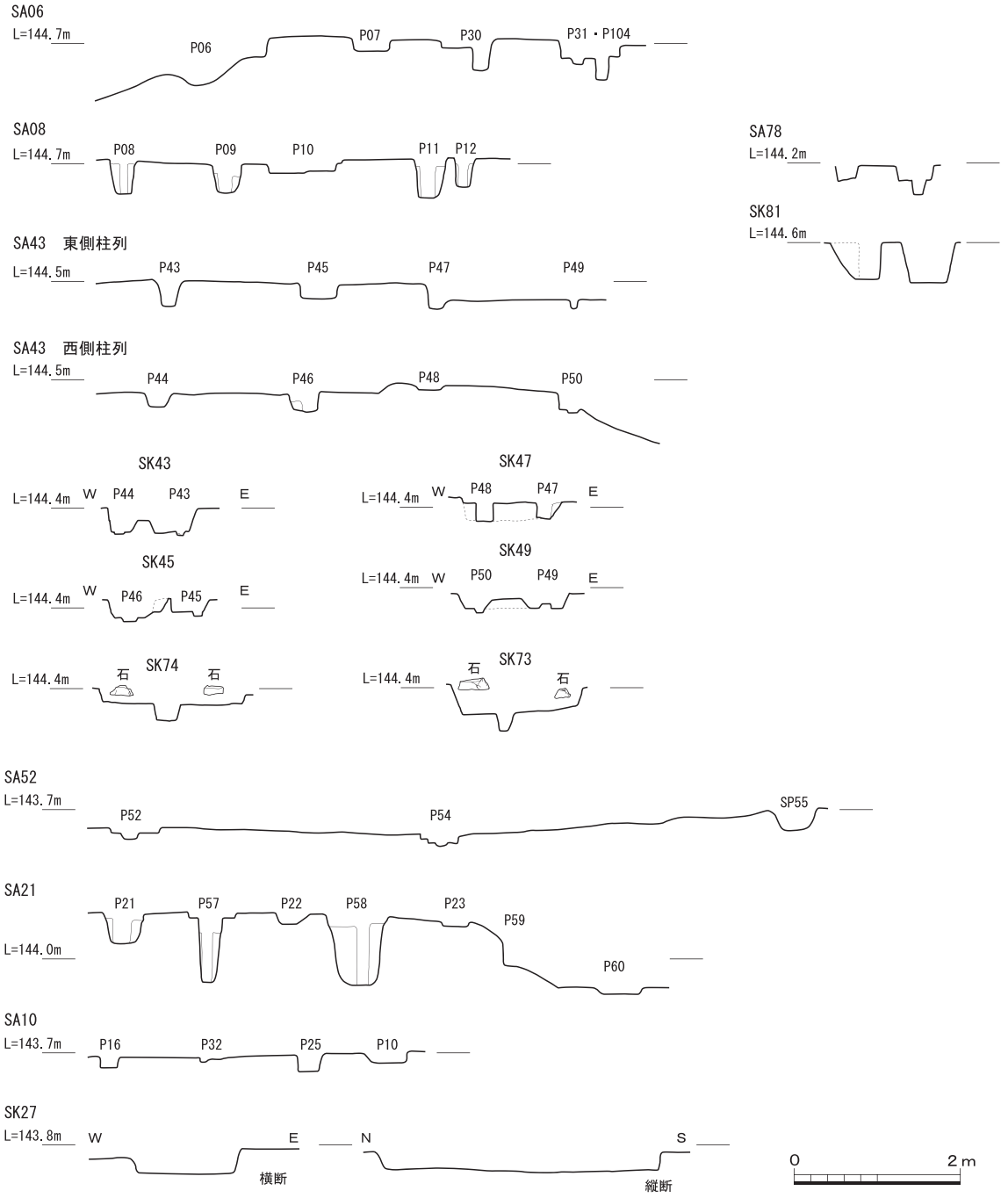
礎石建物跡ＳＢ90　調査地南東部で検出した。南北に1.2ｍ間隔で３間分、東西に1.5ｍの間隔で２列を検出した。掘形は一辺40 ～ 50cmの方形で底面に拳大の川原石を敷き詰めている。根石の主軸は座標北に対してN18.5° Eを測る。



第10図　掘立柱建物跡ＳＢ15実測図

柵列ＳＡ12　調査地の北側東半部で検出した。空堀に並行する東西方向の柱列で、3間分を検出した。柱掘形の直径は0.3 ～ 0.4m、深さ0.2 ～ 0.4mを測る。東端のものは幅0.4m、長さ0.7 ～ 0.9mの楕円形の坑の両端に２本の柱を立てており、南側の柱で柱筋を揃えている。柱筋の主軸は空堀とほぼ平行している。

柵列ＳＡ06（第11図）　調査地の北側東端部で検出した南北方向のＰ06、Ｐ07、Ｐ30、Ｐ31、Ｐ104で構成される柱列で、３間分を検出した。南端部の柱は、南北0.8m、東西0.5mの楕円形の土坑内に２本柱を立



第11図　柵列・土坑断面図

てる構造である（Ｐ31・104）。空堀北側の敷地を区画する柵の可能性がある。柱掘形は直径0.45～0.6m、深さは0.15～0.4mを測り、柱間は1.35～1.5mを測る。柱筋の主軸は座標北に対してN23.5°Eを測る。

柵列ＳＡ21（第11図）　調査地の北側西端部で検出した南北方向のＰ21、Ｐ57、Ｐ58、Ｐ59、Ｐ60で構成される柱列で、空堀北側の敷地を区画する柵の可能性がある。柱掘形は直径0.5～0.7m、深さは0.4～0.8m、柱間は1.35～1.5mを測る。柱筋の主軸は座標北に対してN27.5°Eを測る。

柵列ＳＡ08（第11図）　調査地の北側東寄りで検出した空堀に直交する柱列で、Ｐ08、Ｐ09、

Ｐ101、Ｐ11、Ｐ12で構成される。南端部の柱は、南北0.9m、東西0.4mの楕円形の土坑内にＰ11とＰ12の２本の柱を立てている。敷地内を区画する柵の可能性がある。柱掘形の直径及び深さとも0.3mを測り、柱間は1.25mを測る。柱筋の主軸は座標北に対してN17° Eを測り、空堀とほぼ同じ振り角を有する。

塀ＳＡ43（第11図）　調査地の北半部西側で検出した南北の柱列である。空堀の北側では、1.6～1.7mの間隔で幅0.4～0.7m、長さ1.2～1.7mの楕円形の土坑を掘り、土坑の両端に２本の柱を立てている。空堀の埋土上面では検出していないが、空堀を挟む両平坦面で軸を揃えて検出したこと、堀の主軸が城の主軸に対して大きく傾くことから、空堀を埋めた後に造られたと考えられる。敷地を区画するための塀と考えられる。柱筋の主軸はＳＢ15と同じく座標北に対してN28° Eを測る。空堀の南側で検出したＳＫ73・74は中央部に１本の柱を立て両端に石を据える構造で、両側に支え柱をもつ上部構造が想定できる。

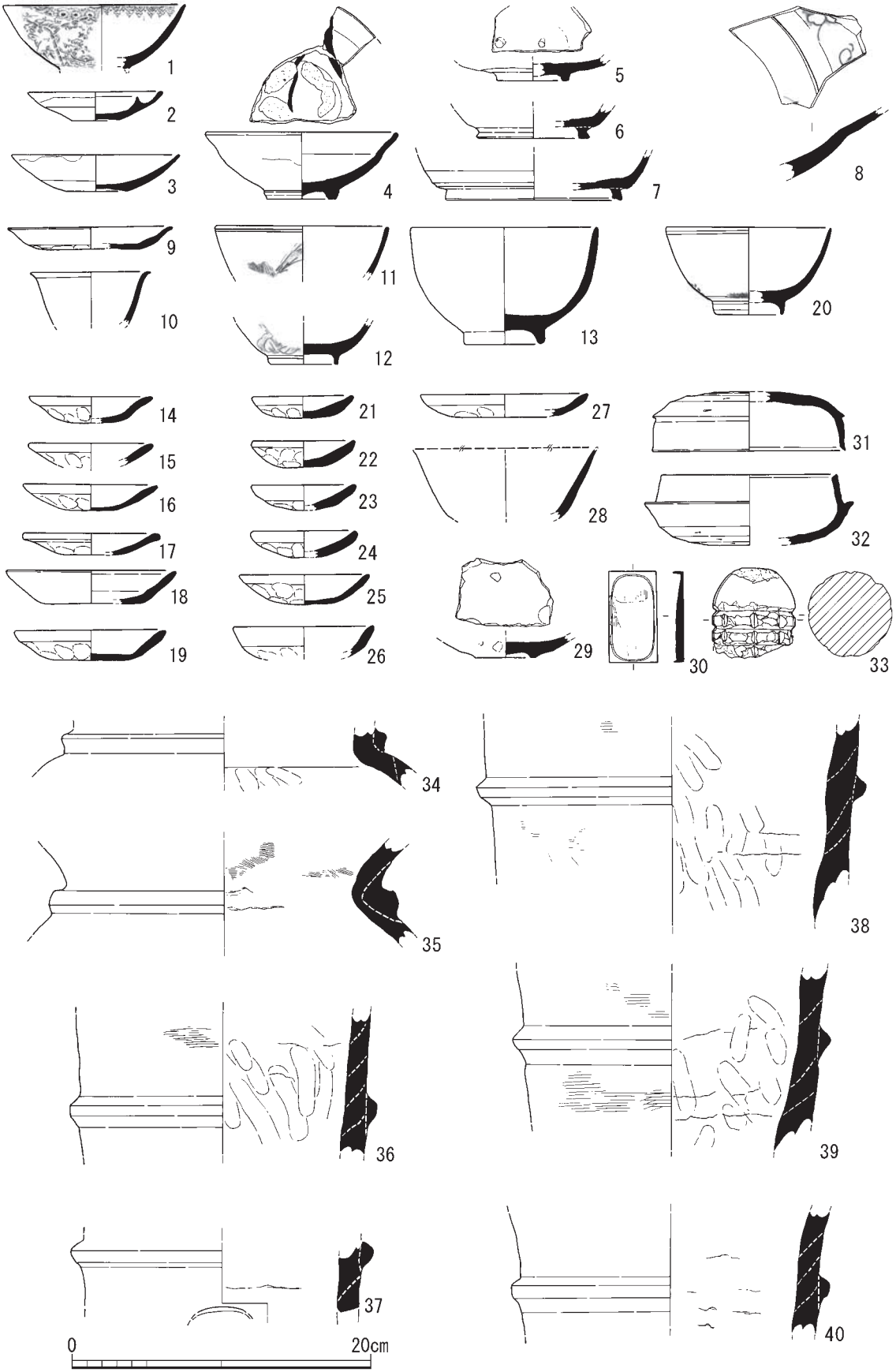
柵列ＳＡ78　調査地の中央部西半で検出した東西方向の柱列である。Ｐ78、Ｐ80、Ｐ105、Ｐ107で構成される。空堀の南辺に並行しており、南側の敷地を区画する柵の可能性がある。柱掘形は直径0.5m、深さは0.2～0.4mを測る。幅0.7m、長さ1.4mの楕円形の土坑の両端に２本の柱を立てている。東側は後世の撹乱によるためか、消失し不明である。柱間は1.8mを測り、２本柱のＰ105とＰ107の間は3.6mを測る。検出地点は土橋の南側の付け根部分にあたることから、門等の施設である可能性が考えられる。柱筋の主軸は座標北に対してN-24° -Wを測る。

柵列ＳＡ87　ＳＢ90の北側で検出した東西方向に並ぶ石列で、石は一辺が20cm程の大きさで平滑な面を上にして据えられていた。東から2.0m、1.7mの間隔を測る。石列の主軸は座標北に対してN22° Eを測る。　（戸原和人）

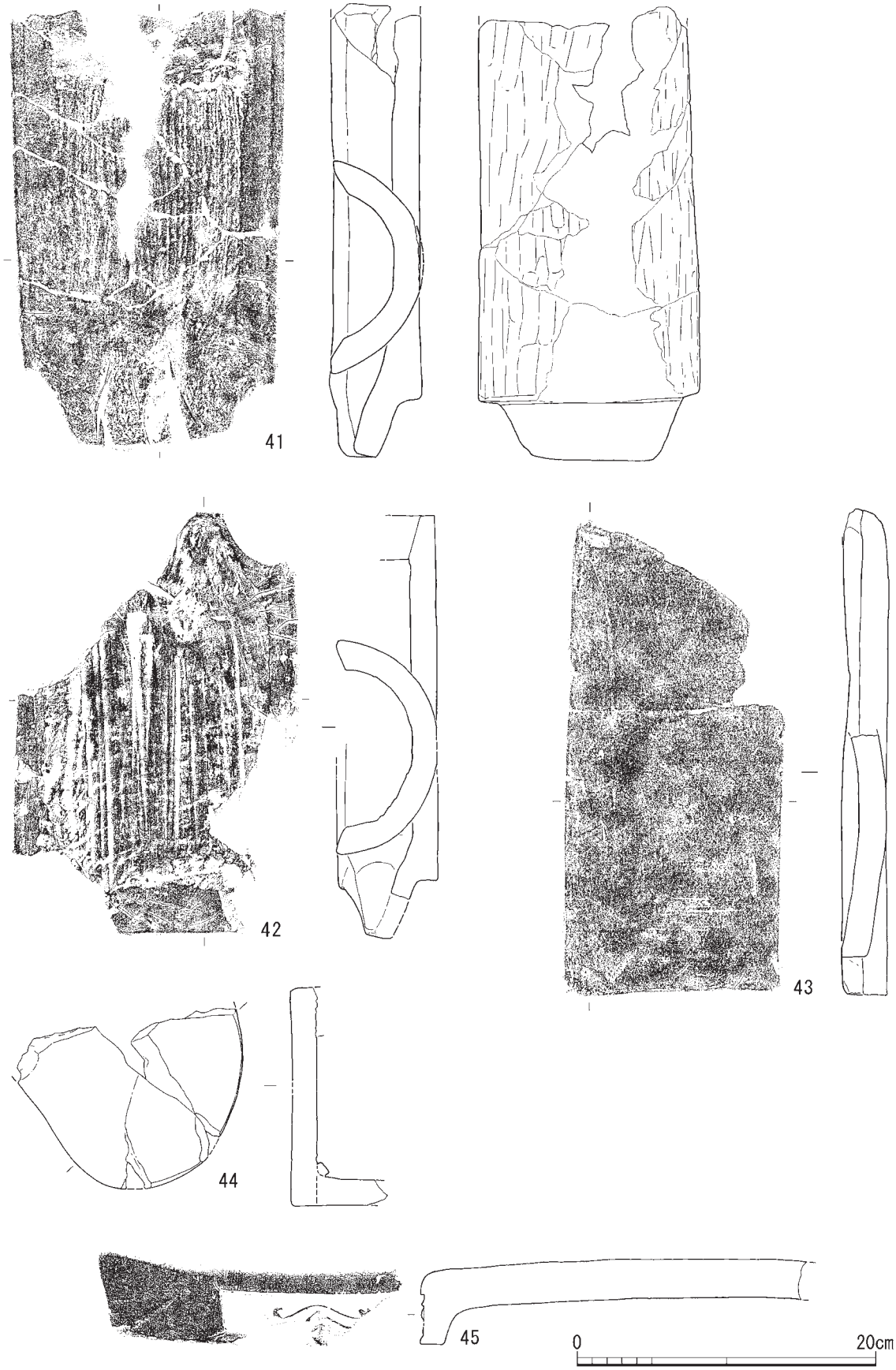
４.出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナ18箱分である。空堀ＳＤ05内から出土したものが最も多く、石組み溝ＳＤ82がこれに続く。瓦類が最も多く次に埴輪、陶磁器類、土師器、鉄器、石製品がある。以下に主な出土遺物について報告する。

空堀ＳＤ05（第12図１～７・34～40・第13図41～44）　明治期の磁器椀、陶器、瓦類、奈良時代の須恵器杯、古墳時代の埴輪などが出土している。１は磁器の椀で復元口径12cm、残存高4.4cmを測る。型紙刷りの印判手で明治期のものである。２・３は陶器の灯明皿である。２は口径8.8cm、器高1.9cmを測る。19世紀の所産である。３は口径11.0cm、器高2.5cmを測る。18世紀末～19世紀の所産である。４は肥前陶器（唐津）皿である。いわゆる「絵唐津」砂目の目跡が残る製品で、口縁部がＳＤ100の肩部、底部がＳＤ05から出土し、接合したものである。口径12.5cm、器高4.5cmを測る。17世紀初頭頃の所産である。５は底径4.6cm、残存高1.55cmを測り、内底面に胎土目をもつ。17世紀初頭頃の所産である。６・７は須恵器杯の底部である。周辺に律令期の遺構が存在することを示す資料である。34～40は堀の底から出土した埴輪片で、朝顔形埴輪の頸部（34・35）、円筒埴輪（36～40）がある。いずれの製品も摩耗が著しく詳細はわからな



第12図　出土遺物実測図（１）



第13図　出土遺物実測図（２）

いが、朝顔形埴輪の頸部内面のハケ目、円筒埴輪の外面横ハケが観察できる。周辺に造営されていた古墳が城の造営に伴い破壊され混入したと考えられる。

41・42は丸瓦である。接合部段仕様で、外面を縦方向のヘラで仕上げ、内面に布目を残す。

41は残存長30.5cm、幅14.8cm、高さ5.7cmを測る。43は平瓦である。44は鬼瓦右下部分の破片である。

土橋ＳＸ04（第15図56）　ＳＤ72が延長して掘削され、ＳＸ04が切断されたと考えられる部分から出土した。56は瓦当の幅42.3cm、厚さ4.0cmを測る大型品で、残存長20.3cmを測る。中央に三葉の唐草文がある。

土坑ＳＫ27（第12図８、第15図57）　８は肥前磁器（伊万里）皿で、「初期伊万里」とよばれるものである。破片のため口径、器高とも不明である。17世紀前半の所産である。57は道具瓦で、小口部分にひらがなで「そのべ」と刻印が施されている。幅26.35cm、長さ33.85cm、厚さ2.7cmを測り、凸面を上にして、中央部に上面幅5.0cm、下面幅2.0cm、上面長11.3cm、下面長9.2cm、の逆台形の穴を穿っている。

石組溝ＳＤ72（第12図９～13・30、第14図46～51）　土師器皿、中国製磁器、肥前陶磁器、軒丸瓦・丸瓦、石製硯などが出土している。９は土師器皿で、口径10.8cm、器高1.5cmを測る。17世紀中葉から後葉にかけての所産である。10は中国製の磁器で、復元径7.8cm、残存高3.6cmを測る。17世紀前半の所産である。11・12は肥前磁器椀である。17世紀後半から18世紀にかけての所産である。13は肥前陶器椀である。口径12.3cm、器高7.9cmを測る。17世紀後半の所産である。30は小型の硯で、幅3.2cm、長さ6.15cm、厚さ0.8cmを測る。軒丸瓦はいずれも左三ツ巴文で連珠文をもつ。三ツ巴文が細く、連珠文が小振りの46～48と、三ツ巴文が太く、連珠文が大振りの49・50に分類される。48は連珠文が大小交互に表現されている。丸瓦（51）は玉縁部分で目釘穴をもつ。外面はヘラ削りで、内面には布目を残す。

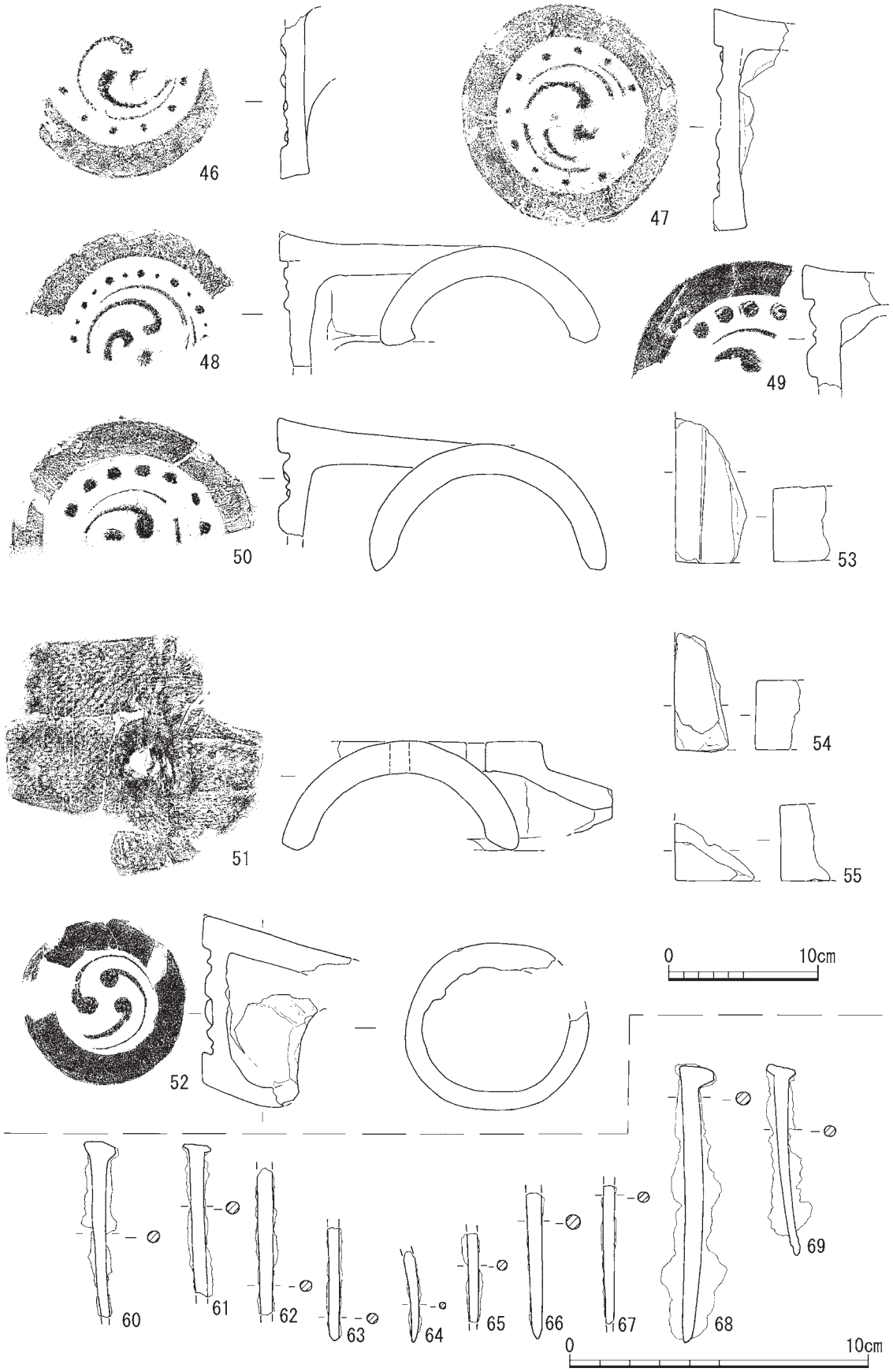
土坑ＳＫ77（第12図14～18･20、第13図45）　土師器皿（14～18）、軒平瓦（45）などが出土した。14は口径8.0cm、器高1.8cm、15は口径8.1cm、器高1.45cm、16は口径8.8cm・器高1.75cm、17は口径8.9cm、器高1.45cm、18は口径11.2cm、器高2.25cmをそれぞれ測る。20は肥前磁器椀である。口径10.9cm、器高5.85cmを測る。17世紀後半の所産である。45は唐草文軒平瓦で、文様の詳細は不明である。

塀ＳＡ43（第14図60～69）　塀の柱掘形を構成する南端部のＳＫ73から８点（60～67）、ＳＫ74から２点（68・69）の鉄釘が出土した。いずれの釘にも木質が付着しており、塀に使用された柱材の結合に用いられたと考えられる。

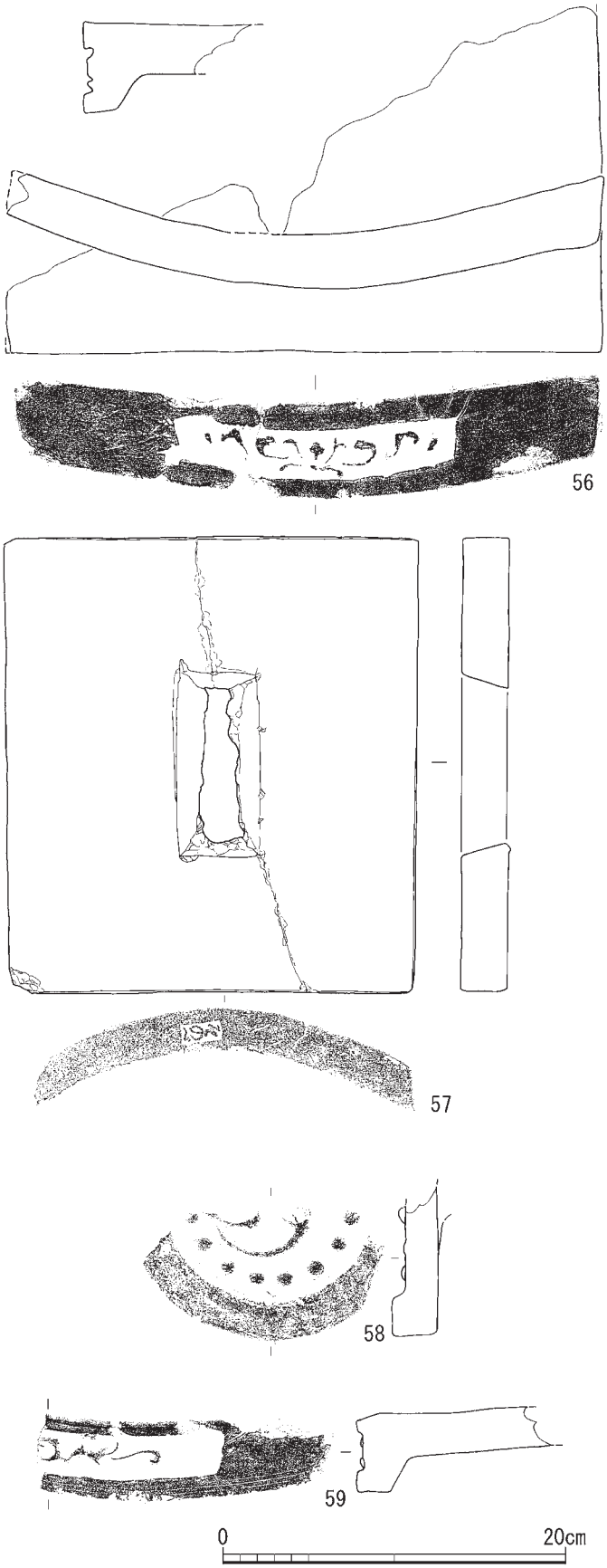
溝ＳＤ85　（第14図52）　52は瓦当の直径11.2cmを測る小型品である。右三ッ巴で連珠文を持たない。瓦当裏面を袋状に造る鳥衾である。

礎石建物ＳＢ90（第12図19）　Ｐ91から土師器皿（19）が１点出土した。口径10.0cm、器高2.0cmを測り、口縁部に灯明芯の痕跡が認められる。17世紀中葉～後期にかけての製品である。

溝ＳＤ100（第12図４・21～29）　陶器３点（4・28・29）が埋め土の最上部から、土師器皿７点



第14図　出土遺物実測図（３）



第15図　出土遺物実測図（４）

(21 ～ 27)が溝の底から出土した。21は復元口径6.5cm、器高1.5cm、22は口径6.7cm、器高1.85cm、23は復元口径6.8cm、器高1.75cm、24は口径6.8cm、器高1.85cm、25は口径8.6cm、器高2.05cm、26は復元口径9.2cm、器高2.1cm、27は復元口径10cm、器高1.55cmをそれぞれ測る。これらの土師器は16世紀末から17世紀初めにかけてのものである。28は肥前陶器椀で、「絵唐津」と呼ばれるもので、口径12.5cm、器高4.5cmを測る。29は肥前陶器皿である。底部径4.0cmを測る。これらの陶器は17世紀初めの製品である。

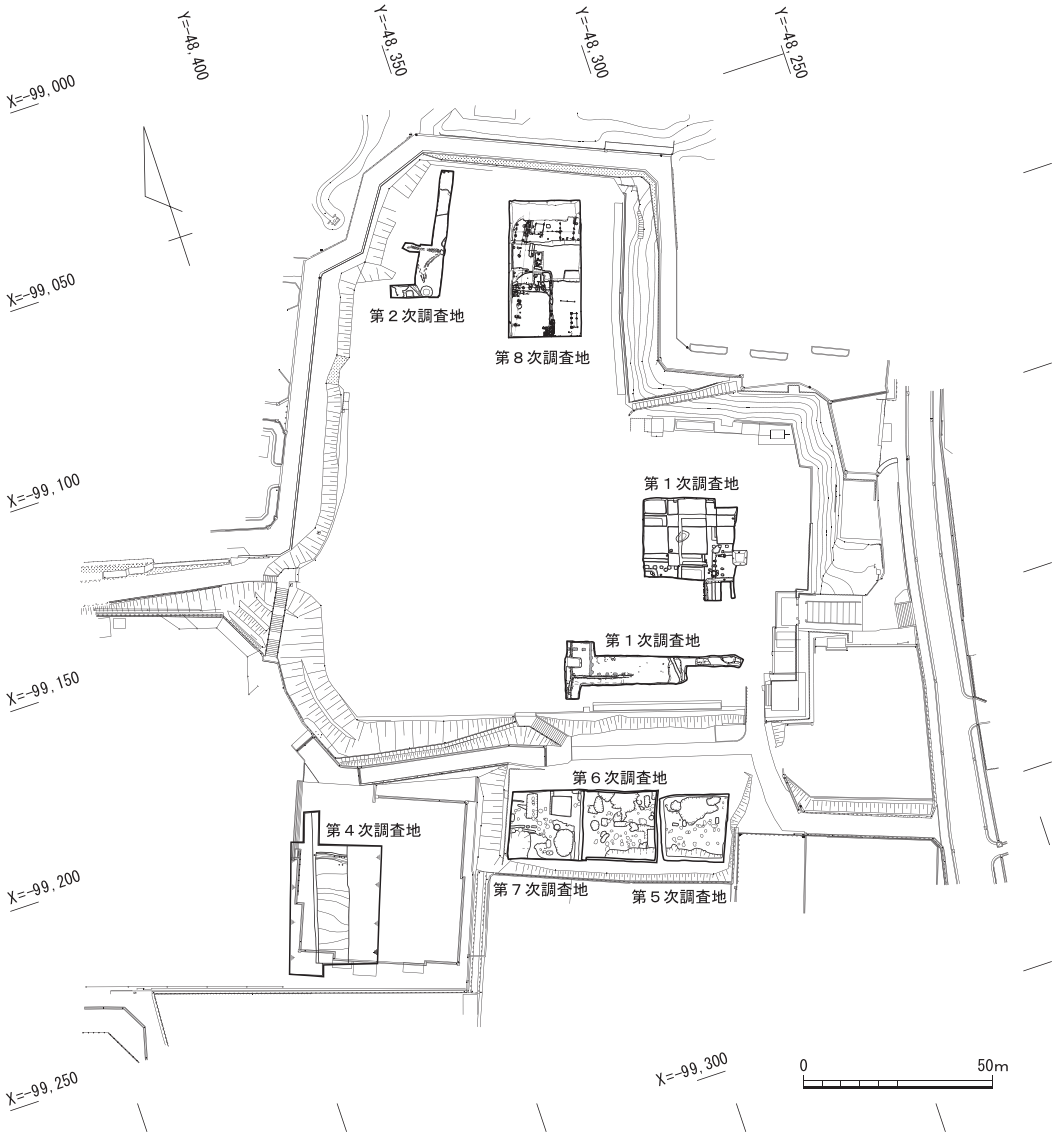
包含層（第12図10・31・33、第15図53 ～ 55・58・59）　古墳時代の須恵器杯蓋(31)・杯身(32)、石塔の相輪と考えられるもの(33)、厚さ5.0cmを測る瓦製の磚(53 ～ 55)、軒丸瓦(58)、軒平瓦(59)などが出土した。31は口径10.8cm、器高4.05cmを測り、32は口径11.6cm、器高4.75cmを測る。周辺の調査でも古墳時代の遺物が出土していることから周辺に造営されていた古墳が城の造営に伴い破壊され混入したと考えられる。33は直径5.5cm、残存高5.95cmを測る。横方向に３段の溝が切られ、さらに縦方向に８条の溝を切っている。かつて、小向山麓に天満宮があったとの記録があり、周辺には近年まで関係する石塔などが残っていた。これらに関係する遺物である可能性がある。

（戸原和人・引原茂治）

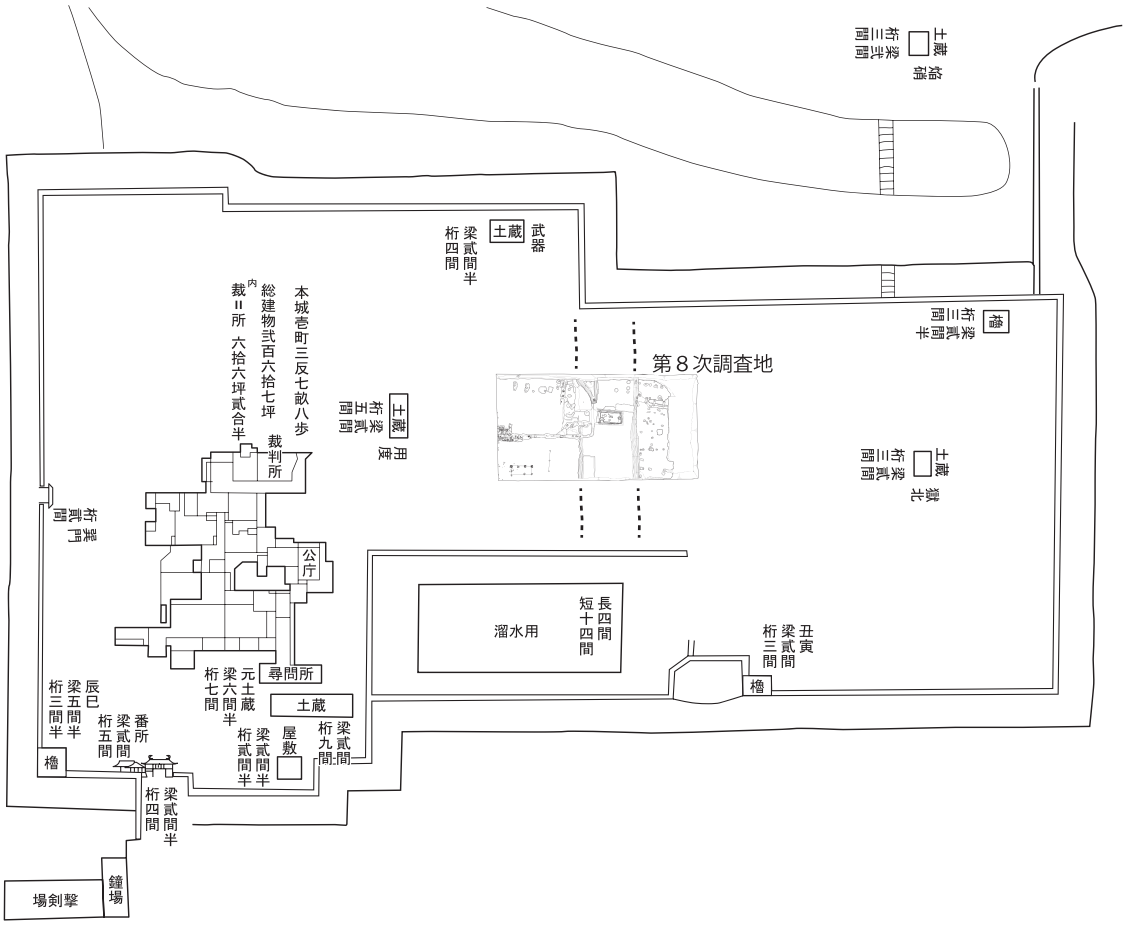
５．まとめ

園部城は、但馬国出石から丹波国園部に移封された小出吉親によって、元和５(1619)年から元和７(1621)年にかけて築城された。以後、幕末まで約250年にわたって、園部藩主小出氏10代の居城となった。園部藩最後の藩主である小出英尚は、慶応３(1867)年に京中見廻役につき、慶応４(1868)年１月に西園寺公望を総督とする山陰鎮撫軍が丹波に入ると直ちに勤皇方に従った。それ以後、翌明治２(1869)年にかけて、城の増改築を行った。天皇の仮行在所にするためとも京都守衛のためとも言われる。

小出氏は無城主格の大名であり、その居城である園部城も本来的には園部陣屋と呼ぶべきものである。承応２(1653)年以後の園部を描いている「丹波国園部絵図」の園部城主郭部分では、門の位置は変わらないものの、櫓門ではなく、薬医門か棟門と考えられる簡素な門が描かれている。櫓もない。園部藩は、元治元(1864)年に修築願を幕府に出したが、認められなかった。その後も幕府と交渉し、慶応３(1867)年に内諾を得たが、直後の大政奉還で正式な許可は得られなかった。



第16図　園部城調査地配置図



第17図　園部城跡絵図（京都府立総合資料館所蔵の明治期絵図をトレース・加筆）

そのため、明治新政府に願い出て修築が認められ、園部陣屋は園部城となった。現存する櫓門や巽櫓などは、この時に建てられたものといわれる。

今回の調査で、築城時の元和年間に掘削され、幕末の修築時に埋められたと考えられる東西方向の空堀ＳＤ05を検出した。これにより、現状では同一の平坦地となっている主郭部分が、江戸時代には南北２か所の曲輪に分かれていたことが判明した。また、空堀は主に北側からの土入れによって埋められており、空堀より北側の曲輪が南側の曲輪よりも高くなっていた可能性も考えられる。さらに、空堀には南北方向の土橋が設けられており、土橋は北側の曲輪の３ｍ手前で途切れていた。この途切れた部分には、跳ね橋もしくは取り外しが可能な簡易な橋が架けられていたと推測される。二条城では、城外から西門に向って堀の中に土橋が設けられており、西門に到らずに途切れる。土橋が途切れる側が重視されている。園部城の空堀で分けられた南北の曲輪では、北の曲輪が高くなり、土橋が北の曲輪の手前で途切れる。このようなことから、北の曲輪が南の曲輪より要地と意識されていたものと考えられる。あたかも、北の曲輪が本丸、南の曲輪が二の丸として意識されているようである。南の曲輪には、大書院や御殿などの政務の場や藩主の生活の場としての建物群があったとみられる。近世城郭では、本丸は城の象徴的な空間で、二の丸に実用的な主要施設が置かれる例が多い。江戸時代の園部城の主郭部は、陣屋というよりも城郭に近い様相であったことが考えられる。江戸時代に作成されたと考えられる絵図には、この空

堀は描かれていない。城絵図では詳細な建物配置などは描かれていない例が多いが、堀や石垣などの、いわゆる縄張りについては描かれている。小出吉親の築城時には、幕府に絵図を提出し、相談を重ねて造作を行ったとされる。その際、櫓の普請も願ったが、二重の堀や狭間付の塀などがあるので櫓は必要なしということで、認められなかった。上記「丹波国園部絵図」には、幕末に大手門として修築された「北ノ門」の横に「櫓台」が描かれている。同図には主郭部分に建物の描写はないが、安政６(1859)年製作と考えられる「園部城略図」には主郭北東隅部に「ヤクラ」が記入されている。位置的に、北の曲輪の北東隅にあたり、天守に擬した櫓もしくはその櫓台と考えられる。しかし、両絵図ともに、今回検出した空堀は描かれていない。あたかも一面の平坦地のように描かれる。未完成状態の造作であっても、空堀を描けば、幕府が認めなかった城郭的な印象を与えるため、描写が控えられたものか。ならば、城郭として修築することを認められた幕末の時点で、なぜ埋め立てられてしまったのか。１つの理由として、幕末の修築時には北西側の小麦山に天守に擬した三重櫓が建てられ、そこが本丸に擬せられたためとも考えられる。したがって、それまで本丸、二の丸に分かれていた主郭部分が、全体的に二の丸的な空間に変えられた可能性もある。疑問は残るが、いずれにしても、今回検出した空堀は今まで知られていなかった遺構であり、不明な点が多い江戸時代の園部城を考えるうえで、重要な手掛かりとなる遺構と言える。

（戸原和人・引原茂治）

参考文献

引原茂治ほか　「園部城跡」（『京都府遺跡調査概報』第４冊　（財）　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982

鵜島三壽ほか　「園部城跡第２次」（『京都府遺跡調査概報』第28冊　（財）　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1988

辻健二郎「園部城第３次発掘調査報告書」（『南丹市文化財調査報告書』　第３集　園部町教育委員会）　2006

黒坪一樹　「園部城跡第４次」（『京都府遺跡調査概報』第70冊　（財）　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996

田代　弘　「園部城跡第５次」（『京都府埋蔵文化財情報』第92号　（財）　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2004

田代　弘　「園部城跡第６次」（『京都府埋蔵文化財情報』第95号　（財）　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2005

中川和哉　「園部城跡第５・６・７次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第119冊　（財）　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2006

高谷茂男　「中世薗部城と荒木山城守の居城について」（『京都府埋蔵文化財情報』第68号　（財）　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

『平成11年度秋季特別展　園部藩と城-維新の築城にいたるまで-』（園部文化博物館）　1999

『平成14年度秋季特別展　生身天満宮宝物展』（園部文化博物館）　2002

『平成16年度秋季特別展　園部の町風景-城下町いまむかし-』（園部文化博物館会館10周年記念）　2004

『平成20年度秋季特別展　園部藩のあゆみ』（南丹市立文化博物館）　2008

園部城跡第８次　図版第１

(1)北半部空中写真(北から)

(2)北半部全景(北から)

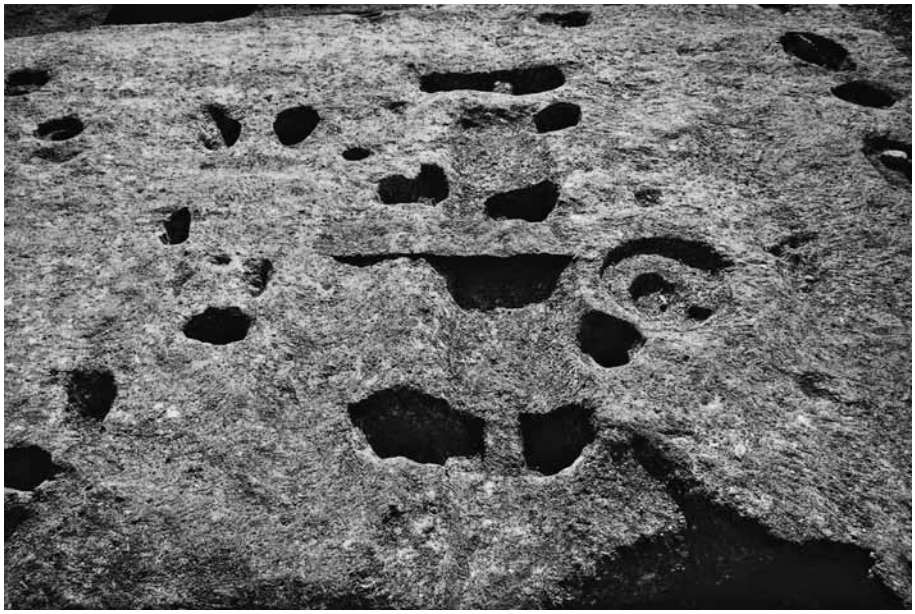
(3)北半部全景(東から)

(1)土坑ＳＫ27(北から)

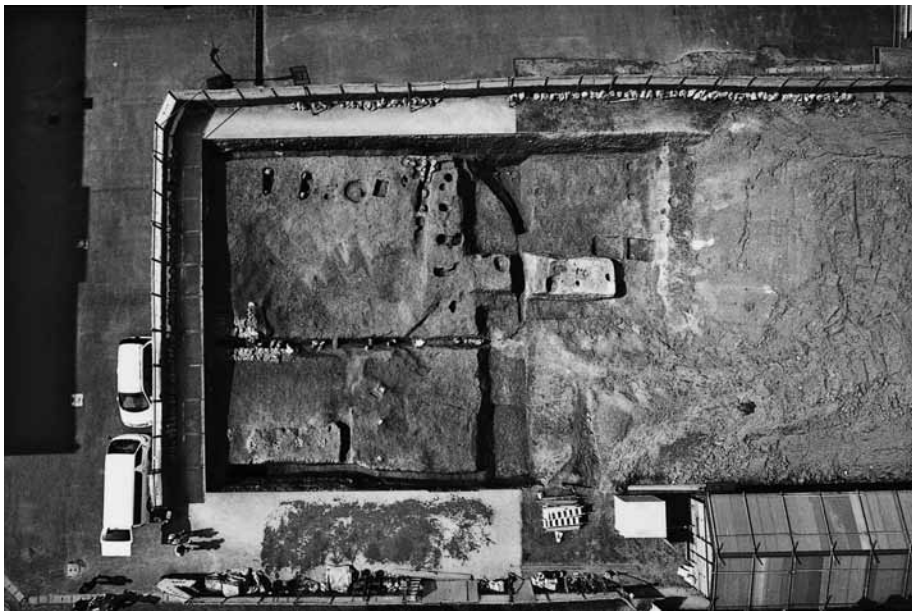
(2)土坑ＳＫ26・柵列ＳＡ06
(南から)

(3)柵列ＳＡ08(南から)

園部城跡第８次　図版第３



(1)塀ＳＡ43(北から)



(2)南半部空中写真(右が北)

(3)南半部全景(南から)

(1)南半部全景(北から)

(2)石組溝ＳＤ72(北から)

(3)石組溝ＳＤ85・柵列ＳＡ78
(西から)

(1)南半部西半(北から)

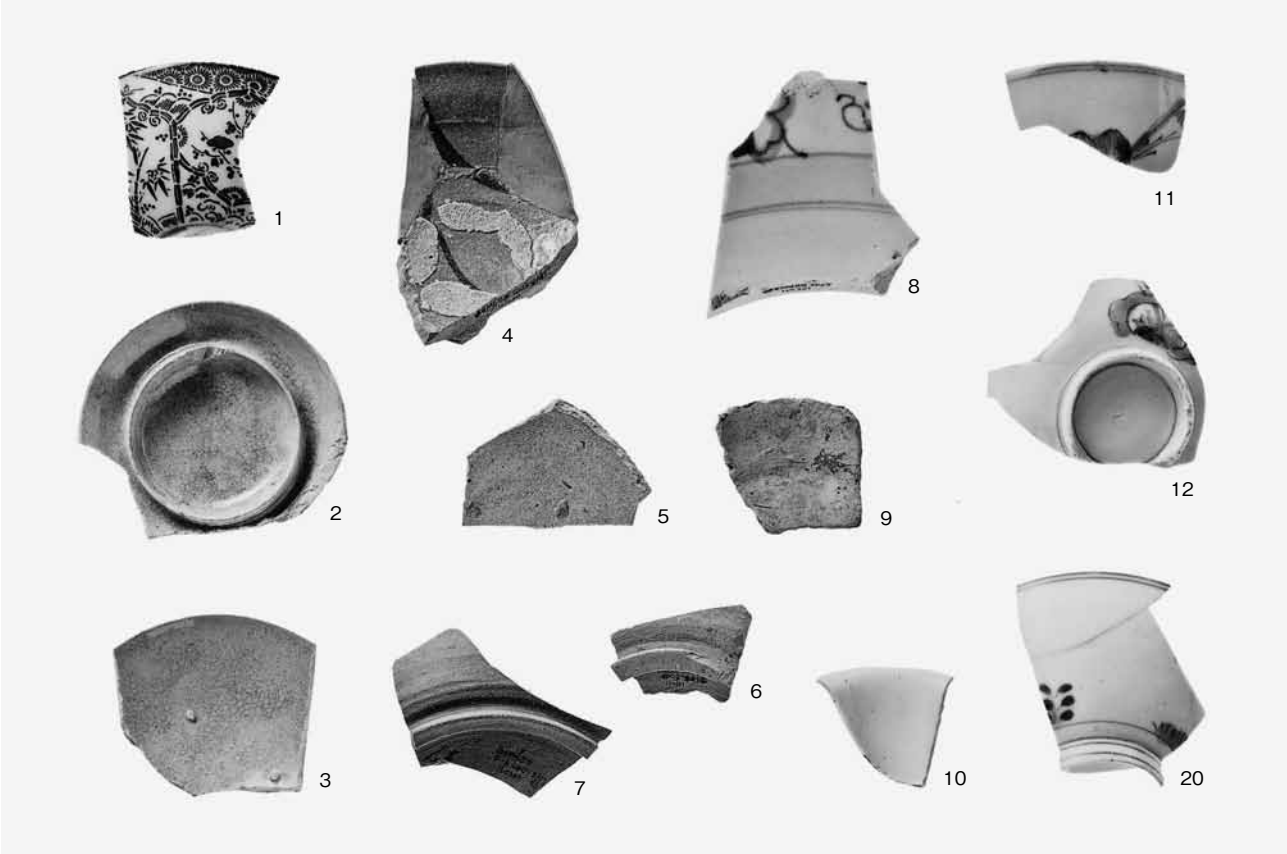
(2)塀ＳＡ43、ＳＫ74(南から)

(3)塀ＳＡ43、ＳＫ73(南から)

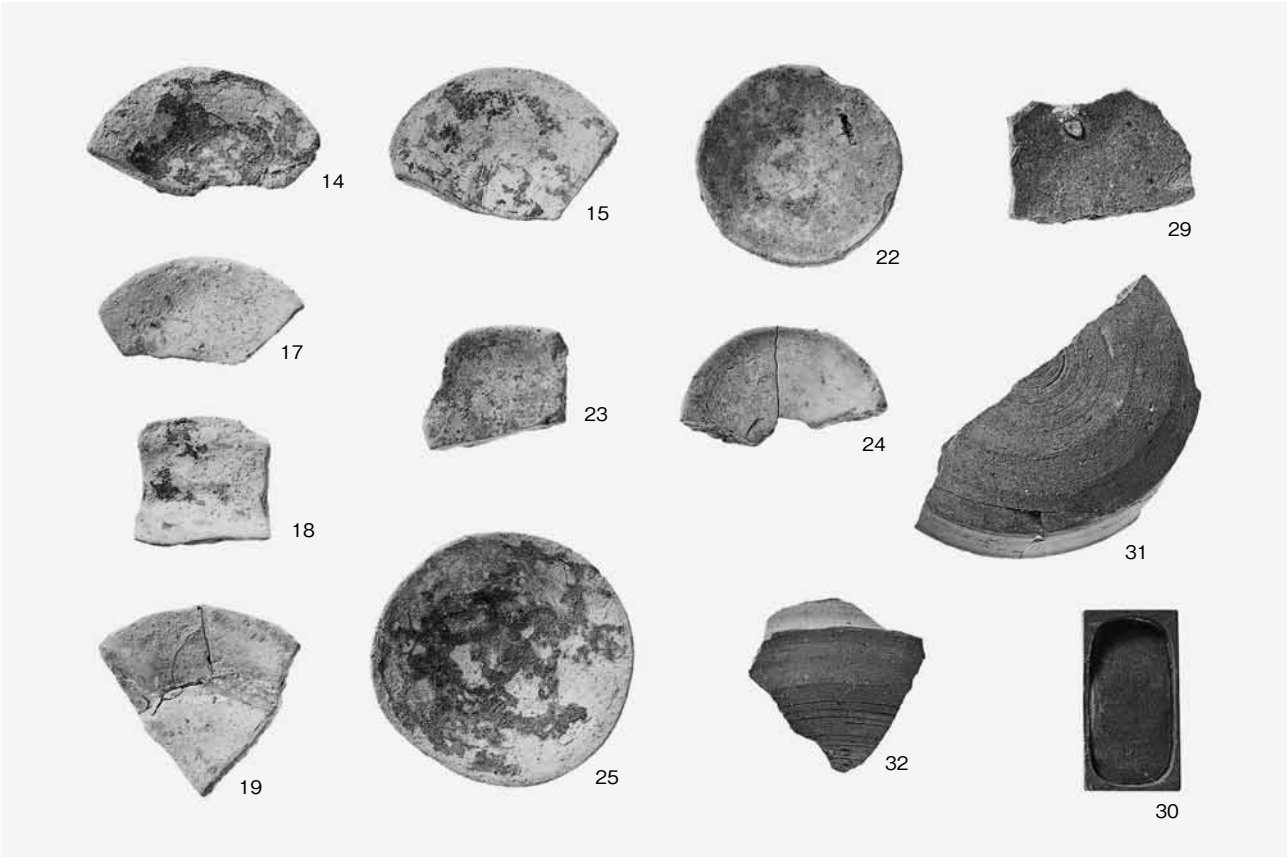
(1)土坑ＳＫ77(北から)

(2)溝ＳＤ100(西から)

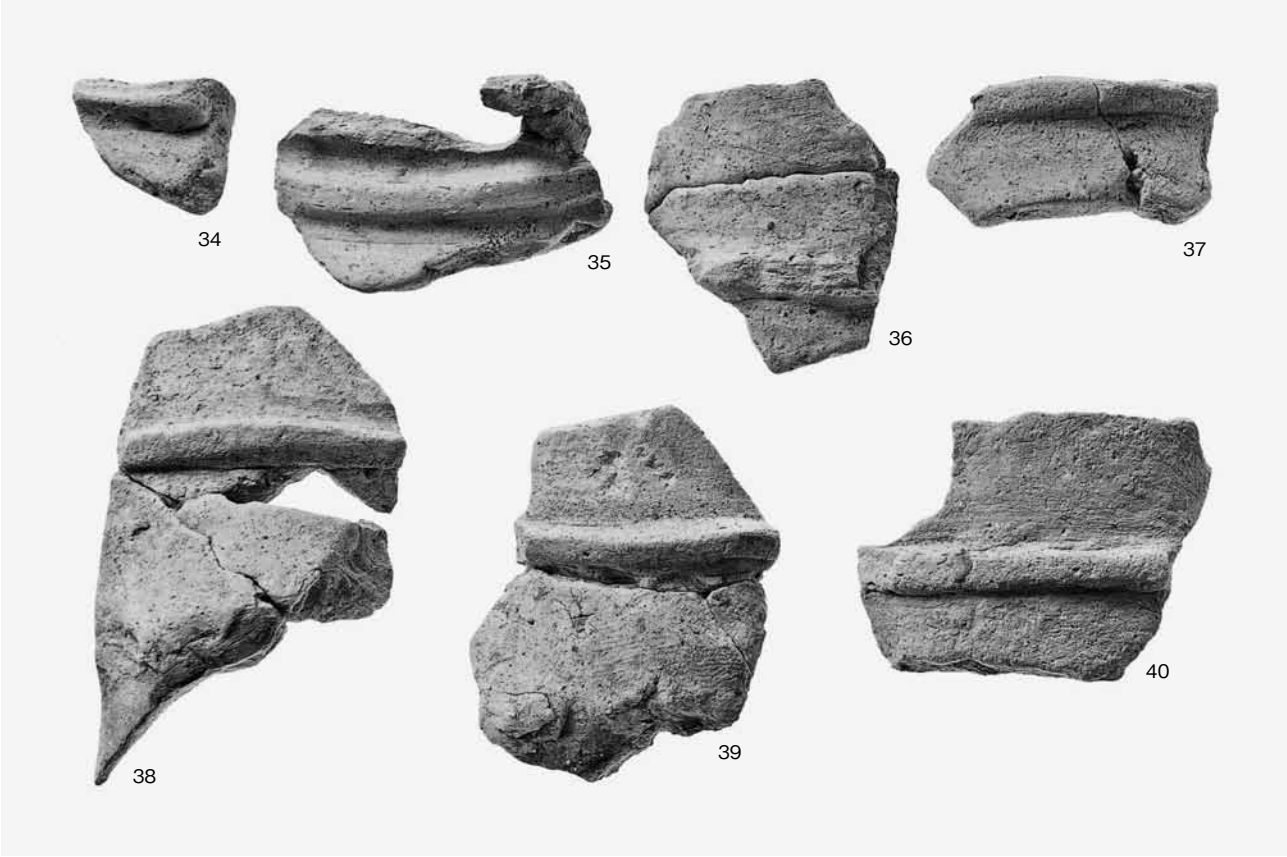
(3)溝ＳＤ100－２(上が東)



(1)出土遺物１



(2)出土遺物２



(1)出土遺物３

(2)出土遺物４

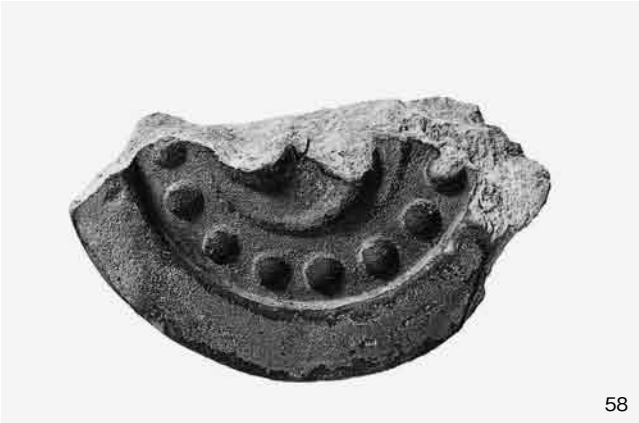
47

48

49

50

52

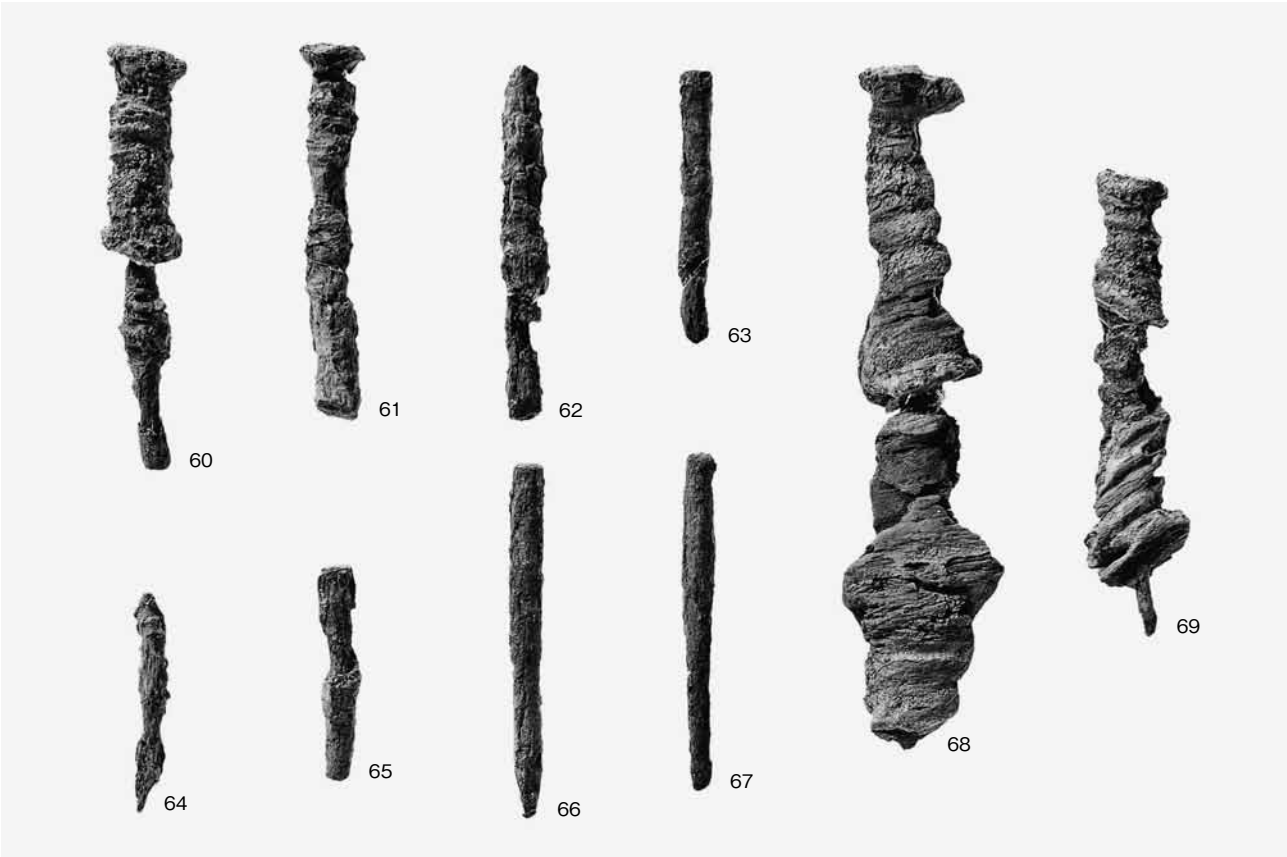

58

56

59

出土遺物５

(1) 出土遺物６



(2) 出土遺物７

京都府遺跡調査報告集 第152冊

平成24年３月31日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三 星 商 事 印 刷 株 式 会 社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141